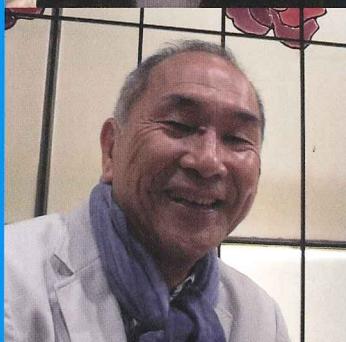
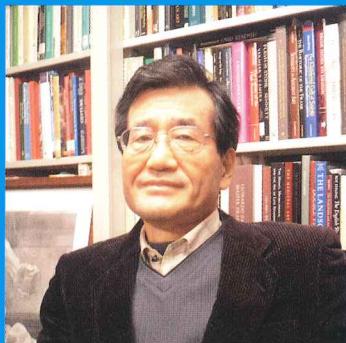
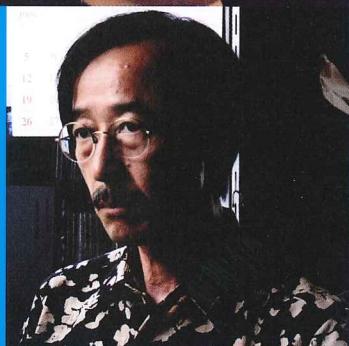
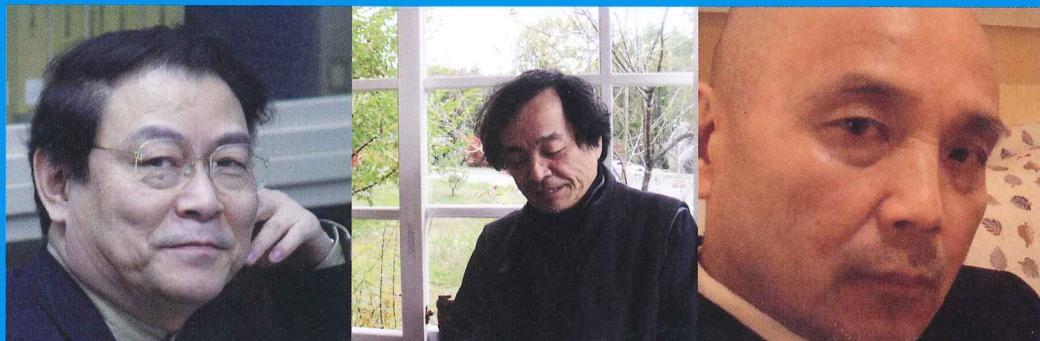




Aichi Geidai News



2012年度は、愛知芸大にとって大きな転換点として記憶される年になるかもしれません。

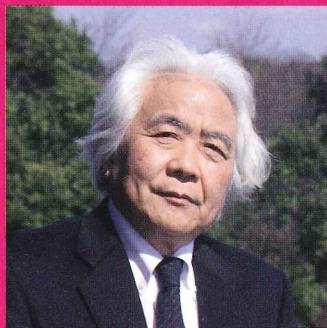
教育・研究・大学運営に携わってこられた7名もの先生が、いちどきに退任を迎えるのです。

先生方の今までのご尽力に深く感謝を申し上げるとともに、それぞれの分野におけるより一層のご活躍を願ってやみません。

今まで有り難うございました。これからも愛知芸大を温かく見守ってくださいますように。

退任される先生方からのメッセージ  
特集は6ページをご覧ください。

No. 60



愛知県立芸術大学学長

磯見 輝夫 いそみ・てるお

3月11日の震災から、やがて2年の月日が経とうとしています。震災の残したことについて、少しづつ記憶が薄れ、このまま忘れられるのではないかとの危惧があります。平成24年11月7日に五芸術大学協議会が金沢でひらかれ、協議と共に宮城大学の学長及び先生をお招きして、災害支援のシンポジウムを開きました。今被災地の共同住宅では、引きこもりや無力感が人々を支配し、決して健全な未来を予測することができない状態が続いているそうです。そこで五芸大では被災地の方々の想いに寄り添い、文化芸術の力を生かして、人々の心を喚起できるような支援を続けることを確認しました。

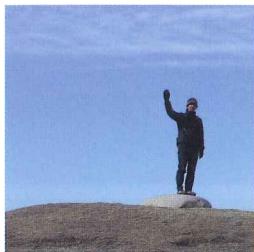
10月スコットランドのオークニー島での展覧会の際、BBCの地方局のラジオのインタビューを受けましたが、その質問の中に、あの3月11日の災害は日本のアーティストにどんな影響を与えたかという質問がありました。私はあの震災の前と後では大きな違いを私自身の中に持っており、多くの作家がそれの中にも抱いているだろうと答えましたが、実際それは日本の芸術家にとって目をそらすことのできない現実です。これから芸術活動を続ける我々に深く重い影響を与えるものでしょう。

6年前の法人化と共に県より定められた第1期の中期目標も今年度いっぱい完了します。この第1期の目標には、その項目の多さに振り回され、大変多くのエネルギーを費やしました。このことを踏まえて、第2期の目標は県との同意もあって、大幅に縮小されます。

次期中期目標は、愛知県立芸術大学のこれまでの教育の継承を前提として、それをさらに進化、また深化させることを柱にしています。大学のこれからの方針としては、教育、研究の国際的水準の担保を目標に掲げ、大学を国際的に位置づけることを明確にしました。

第1期中期目標の完了と共に、私も学長としての任期の終了が近づいてまいりました。これまで学長という職を何とか続けてこられたのは、法人役員、教職員、学生の皆さん、学内外の多くの方々に支えられてのことでした。おそらくこうして公の紙面に言葉を寄せることは最後になると思います。これまでのご支援を心からお礼申し上げます。また同時に愛知県立芸術大学の頤爽とした未来を願います。

平成24年4月1日に赴任された先生方をご紹介します。



**猪狩 雅則**  
いがり・まさのり  
油画専攻講師

私が愛知県立芸術大学に入学したのは1998年で、33期生にあたります。長久手の丘陵地に大胆に設計されたこの大学は、入学時すでに長久手の自然と見事に融合し一体化していました。季節ごとにその自然の彩りによって変容していく大学は、それぞれが美しく、それを印象深く覚えています。

当時大学には公舎が複数あり、油画専攻の教員の多くはその公舎に住んでいました。そのせいか、先生方は、今よりも少し学部生にも近い存在で、クラスのみんなで公舎での食事会などに招かれる事も多々あり、たわいもない話や美術の話をたくさん聞かせていただいた記憶があります。

この大学に赴任し、もうすぐ1年が経ちます。10年以上前、そのように学生として通っていた大学は、公舎も減り(そういえば今年から芸術祭も禁酒になっていた!)、油画専攻の入り口も自動扉に変化し、トイレは驚愕のウォシュレット! 新音楽学部棟も建築中と、少しづつですが、ずいぶんと様変わりしていました。

様変わりしたのは、大学だけではなく、情報化社会への急激な変化などにより、美術を巡る世界も、私の学生時代とは随分と変化したように感じます。

しかし、学生と話していると、私が学生時代感じていた将来に対する不安や、作品制作に対する疑問、美術作品への疑問、社会に対する憤り、創作に対する真摯な姿勢など、時代は変わっても、本質的には当時とそう変わっていないような印象をうけました。

学生として通学していたアトリエに、教員として入っていくのは、なんだか不思議な感覚です。何もわからないまま絵を描いていた、あの学生の時の気持ちを思い出しながら、当時と同じこの大学で、教員として、作家として、人間として成長していきたいと思っています。



**内本 久美**  
うちもと・くみ  
器楽専攻(ピアノ)准教授

ピアノという楽器を通して表現することは、私にとって、自分の経験やそれに伴う感情と向き合うための良い機会でもあります。嬉しかったり、悲しかったりした時の感情を自分の中に生かしておいて演奏に反映させる、ということは、非常に困難ではありますが必要不可欠です。

私が長く住んだイタリアはラテン民族らしい感情の起伏の激しい国民性が特徴です。実際、彼らは何かにつけて大袈裟であり、我々日本人であればただ耐えて黙り込むような事柄にも、敢えて大声で抗議します。一人が抗議しているうちに、それに同調する者、異議を唱える者など自分の意見を述べたい者がわらわらと集まってきて大騒ぎとなった挙句、発端となつた出来事に全く関係のない者同士で激しい口論となるようなことも多く見られます。

自分の感情や意見を外へ向かって直接的に表すというのは、一般社会的には迷惑と取られることがあるかも知れませんが、音を表現するという場においては大切なことと思います。そのための手段として日々練習を重ね、演奏技術を磨くことは重要ですが、部屋に籠り勉強するだけではなく、学内の縁に恵まれた自然の中を歩いてみたり、図書館で多くの本を読むこと、美術の展示を鑑賞することなども、音楽により深みを与えてくれることでしょう。

規律や思いやりの精神という、日本人が世界に誇れる美德を保つつも、音楽を通して自分の思いを明確に伝えられるような演奏家や教育者たちの成長の一助になることができれば幸いと存じます。

## 国際交流事業の活動報告

現在、本学の国際交流協定校は8ヶ国10校となりました。そして、その中のケルン音楽大学とハンブルク音楽大学へ、4月から音楽研究科博士前期課程の学生2名を派遣し、本学協定校への初となる派遣留学事業を開始いたしました。ヨーロッパでも最高峰とされるこれらの大学で学ぶ機会を得た学生からは、大変充実した研究活動を行うことができたとの報告を受けております。

5月にはこれらの両大学へ音楽学部長(研究科長)が留学生の状況を確認するため訪問し、この訪問によりハンブルク音楽大学の学長であり、作曲家でもあるエルマー・ランプソン学長の本学訪問が実現しました。ランプソン学長は音楽学部の定期演奏会に参加され、その中で日本初演となる自身の作品を本学学生オーケストラとの共演という形で披露していただき、素晴らしい交流となりました。また11月には、ケルン音楽大学で本学の留学生を指導していただいているヤコブ・ロイシュナー教授にも来学いただき、本学奏楽堂にてピアノリサイタルを開催することができました。

一方、美術学部においても大きな国際交流事業の実施をいたしました。11月、本学にとって長年のパートナーであるエジンバラ芸術大学へ本学学長および教員が訪問し、展覧会、レクチャー、ワークショップ等の種々の交流を行ったのです。近年、エジンバラ芸術大学にもエジンバラ大学との合併という大きな変化があり、この訪問は両学にとって新たな絆を育むための記念すべきものとなりました。

また1月には、昨年3月に協定校のボストン美術館芸術大学で開催され好評を博した、両学教員による共同展覧会『FORMS IN FLUX』が、出展作家の一部を新たに名古屋ボストン美術館で『FORMS IN FLUX』～すくいとられたカタチ～と題して開催されることとなりました。

今後も様々な国際交流事業を積極的に展開し、より多くの学生や教員が『世界を舞台に活躍できる』大学づくりを目指したいと考えています。

## 交換留学生からの報告(協定校への派遣留学事業)

この度、交換留学の機会をいたいで、日本では味わえないような貴重な体験をさせていただいています。大学ではドイツ人はもちろん、個性豊かなさまざまな人種の生徒がいて、刺激をもらうことも多く、交流する中でも音楽について意見を交換したりしています。週1回のレッスンの他にも、週1回門下の発表会があり、毎週新しい曲を用意するのは大変ですが、人前で弾くことはもちろん、仲間の演奏を聞くことからも多くを学んでいます。休みの日には作曲家が生まれた地を歩いたり、本場の演奏会を聴きに行ったりと充実しています。演奏会の機会も何度かありましたが、お客様から直接、よかったよ、と声をかけていただき、これからも音楽を精一杯勉強したいという気持ちが自然と湧き上がりました。ドイツは、国全体が音楽を、とりわけクラシック音楽を愛し、自然な形で現代の音楽へと受け継がれているということを肌で感じられたことは、日本では決してできない経験ではないかと思います。このような素敵な体験をさせていただいていることに心から感謝しています。

(音楽学部 三上 純里香)

交換留学生としてハンブルク音楽大学に来て早半年少しが経ちました。今ようやく私は異国の土地で音楽の勉強をし、生活しているという実感が湧いている状態です。ハンブルクは本当に綺麗な街です。学校の近くにアルスター湖があり良く散歩をするのですが、今の時期は紅葉も終わりに近づき、空気も張りつめて冬の匂いを感じます。音楽に集中できる環境で、でも音楽の事だけを考えるというよりは、もっと他の大きなことを考えている気がします。例えば、心に訴えてくる演奏を聴き、その音楽家がどういう人生を歩んできたのか、何を経験してきたのかなどということを考えます。人としてどう生きていくか、人生を楽しむには…。心が生きていないといい音楽ができないということを日々感じます。私は幸いにも、このような機会をいただき勉強することができ、先生にも周りの友人たちにも支えられています。後残り少ない期間ですが、伝えられる音楽家を目指して日々過ごしていこうと思っています。

(音楽学部 中村 育)

## 第45回定期演奏会

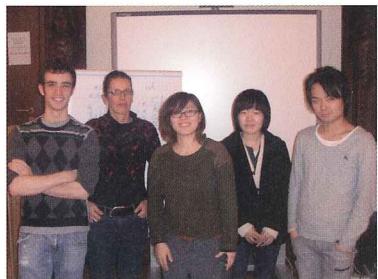
愛知県立芸術大学音楽学部第45回定期演奏会は、平成24年10月9日(火)、10日(水)の2夜にわたり、愛知県芸術劇場コンサートホールを会場に開催されました。

本学の音楽創造を発信する機会として、選抜された学部学生の独奏、独唱による多彩な楽曲の上演とともに、大学院生や教員との共演によるアンサンブル演奏もあり、定番の女声合唱の演奏加わり、多種多様な楽曲による充実したコンサートを聴衆に届けることができました。

2012年はアメリカの作曲家ジョン・ケージとフランスの作曲家ジャン・フランセの生誕100周年のアニバーサリーであることから、第1夜にケージの打楽器アンサンブル作品、第2夜にフランセの弦楽合奏作品を、学生と教員の共演で演奏しました。また、第1夜にはピアノコースから2台ピアノの作品が上演され、第2夜には声楽専攻女声合唱団による現代の合唱曲が演奏されました。女声合唱は早世の美術家村山槐多の詩をもとにした作品でした。

今年度はさらに、本学と国際交流協定を締結したハンブルク音楽大学の作曲科教授エルマー・ランプソン学長の作品を本人の指揮と学生と教員による特設室内オーケストラによる演奏で上演するというこれまでにない、試みを加わりました。

本学の音楽学部定期演奏会は、学生に加えて教授陣も参加して本学全体の音楽創造力を発信する演奏会として、独自性を打ち出す試みを続けていますが、今後は国際交流提携校との共演もラインナップの柱となることが期待されます。



## 藝大アーツ・サミット2012 アジアから世界へ 連携と共生



10月9日から12日に、浅草ビューホテル及び創立125周年を迎える東京藝術大学にて、アジアから世界に向けた芸術大学の連携のあり方、アジアの新たな芸術創造に関する国際会議「藝大アーツ・サミット2012

アジアから世界へ 連携と共生」が開催されました。会議には、8か国1地域(韓国、モンゴル、インドネシア、ベトナム、タイ、シンガポール、マレーシア、台湾、日本)23大学の学長を始めとするトップが集まり、本学からは、磯見学長、寺井芸術創造センター長、松本学務部芸術情報課長が参加しました。各大学は、この貴重な機会に実りある論議を行い、交流を深め合いました。

10日 鼎談「アジアの芸術文化の未来」

シンポジウム1「アジアにおける芸術の独創的展開」／シンポジウム2「アジアの芸術 今後の連携のありかた」

11日 東京藝術大学の教育研究現場の視察

邦楽公演「和楽の美」

シンポジウム1での磯見学長の報告は、とりわけ好評であり、「多様な民族、風土、歴史、をふまえたアジアの多様な国々の文化を、アジアとして一様にくくることが適切であろうか」「西欧がリードする現在の社会に対する提言として“アジア”にまだ残されている、人間が自然の一部であった文化を拾いだすことには、大きな意味がある」の発言には、多くの出席者の賛辞を得ました。最後に、「我々は、アジアの芸術の発展のために、お互いを尊重し交流を深め、ますます連携を強めていく。これまでの様々な交流の上に新たなテクノロジーをも駆使し、“共生の場”を共同で構築していくことをここに宣言する」の共同宣言を採択しました。本学も、音楽学部・美術学部ともにアジアの国際交流締結大学を持っていますが、今後も更なる多様な国際交流活動を展開し、世界を舞台に活躍できる人材の育成、大学の魅力づくりに注力していきたいと考えています。

## アーティスト・イン・レジデンス 2011/12

芸術創造センターの主催するアーティスト・イン・レジデンスは、本学の研究・教育を活性化することを目的に、国内外から様々なキャリアの芸術家を招いて開催しています。

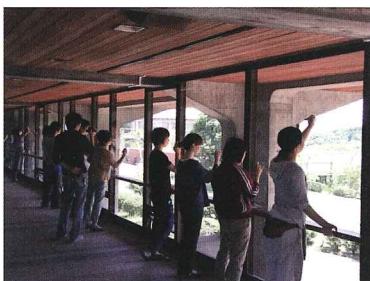
美術分野では、まず2011年に、本学大学院を修了して世界のアートシーンの第一線で活躍するポップアート作家奈良美智氏を招聘して、アーティスト・イン・レジデンスを開催しました。今回のプログラムは、2012年に開催される個展に出品する作品を制作したいという奈良美智氏の希望と国内外から様々なキャリアの芸術家を招いて、本学の研究や教育を活性化するというレジデンス事業の目的が合致して実現したものであり、2011年8月から2012年2月までの長期にわたる滞在制作となりました。期間中には、美術棟大工房での铸造立体作品の石膏原型の製作及び学生等への製作公開や講義、芸祭ではOB講演会など学生との交流が盛んに行われました。学生にとっては、世界で活躍するアーティストと同じ空間で制作ができるこや作品に対するアドバイスなど教育上の刺激が与えられるとともに、時に悩みながら作品を制作する著名な作家に接することで、芸術に対する姿勢や生き方が学生に伝えられました。

2012年は、4月1日から7月31日まで、本学大学院を修了した美術家浅井真理子氏を招聘して、藤沢アートハウスを滞在制作の拠点としたアーティスト・イン・レジデンス事業を行いました。今回の企画では、サテライトギャラリーと藤沢アートハウスで個展を開催し、2カ所につながるインスタレーションなど、そのコンセプトと独自の感覚で、「場」と共振し多様な印象を喚起させる独創的な作品が提示されました。また、県内の中学校において行われたワークショップでは、2つの個展の主要な作品であるsomewhere not hereが制作され、この作品は、関連企画展示として豊田市美術館の窓ガラス3か所で先行提示されるものと共に、2つの個展と連動して一時期県内数カ所に現れ、大きく空間をつなぎました。藤沢アートハウスでの滞在制作、2つの個展とギャラリートーク、ワークショップ、公開制作、アーティストトーク等、4ヶ月にわたる浅井真理子氏による様々な活動は、地域文化との交流、美術作家を目指す学生に刺激を与えながら展開されました。

音楽分野では、まず6月にイタリアからソプラノ歌手のダニエーラ・ウッチャッコ教授(ミラノ・ヴェルディ音楽院)と指揮者のアウグスト・チャヴァッタ氏夫妻を迎えて、「魅惑のベルカント」と題して公開レッスンなど一連のプログラムを実施しました。プログラムの最後にはイタリアオペラのガラコンサートを開催し、ウッチャッコ教授はヴェルディのオペラアリアを披露し聴衆に感銘を与えました。震災と原発事故の影響から昨年度開催予定が延期され、2年越しの企画となりました。招聘担当の二神教授には連絡調整から通訳に至るまで様々なに尽力していただきました。

7月にはフランスから電子音響音楽の分野で作曲と音楽学研究で活躍するマルク・バティエ教授(ソルボンヌ大学)が2度目のレジデンスアーティストとして招かれました。2009年の招聘を契機に、音楽学分野での共同を中心に、本学とソルボンヌ大学との学術交流協定が締結されました。今回はこの交流を記念して「マルク・バティエ:電子音響音楽の世界」のタイトルで一連のプログラムを実施しました。前回は開催できなかったコンサート企画を取り入れ、バティエ氏と周辺の作曲家の作品を上演するコンサート「マルク・バティエと彼の仲間たち」の開催と、数回のレクチャーが実施されました。一部レクチャーのプログラムは名古屋大学との連携でも実施され、バティエ氏を核に本学とソルボンヌ大学、名古屋大学、名古屋市立大学の教員学生の交流が活発に行われました。

11月にはドイツからトランペット奏者のウーヴェ・コミュケ教授(ワイマール、フランツ・リスト音楽大学)を招きました。コミュケ教授も2回目のレジデンス招聘で、今回もまたウィンドオーケストラ定期演奏会でソリストとして出演し、共演の学生と聴衆を魅了する演奏を聴かせました。今回はコミュケ氏の演奏を聴く機会を増やし、ウィンドオーケストラ定期演奏会に加え、武内教授と卒業生のトランペット奏者(稻垣路子、赤堀裕之史)、4名のトランペット奏者によるコンサートも開催しました。ウィンドオーケストラでの協奏曲に加えて、独奏とアンサンブルを聴かせる内容となりました。短い滞在期間中に学内外で多くの演奏会に出演していただき、レッスンなどを通じて学生と教授陣そして卒業生らと深い音楽を通じた交流を果たしました。



## 平成24年度に退任される先生方からのメッセージをご紹介します。

**松村 公嗣**  
まつむら・こうじ  
日本画専攻教授



教員生活が35年、学生・非常勤時代を含めますとほぼ半世紀にわたってこの愛知県立芸術大学にお世話になったことになります。あっという間でした。これだけ長くありますと、校内で花の咲いている場所や蛇の巣穴がどのあたりにあるかといったことまでわかるようになりました。入学当時はまだ開学間もなく、新鮮な力で溢っていました。音楽・美術学部の複合大学は全国的に珍しく、著名な先生方が綺羅星のごとくおられ、学生はみな羨望の眼差しで見ていました。私にとっては様々な想いの詰まった学び舎もあります。

それぞれの専門分野が誇りを持ち、実技を競い合える場としてとても存在意義のある大学だと思っております。個人が向上心を忘れず未来を見つめていれば、必ずといい方向へ向かうのではないかでしょうか。

この大学に出会い、日本画を描き続けることができたことに感謝いたします。長い間、ありがとうございました。

**角島 直樹**  
かどしま・なおき  
日本画専攻教授



私がこの緑豊かなキャンパスで過ごしたのは学生時代を含めて45年である。当然ながら苦しみもあり充実した喜びもあった。制作を通して自分と向き合い模索する時、そこには理想や希望も見るが、未熟さやもどかしさとも対峙せねばならない。学生であろうと教える立場であろうと、制作していく限り続くことである。

退任するにあたり一つまた人生の区切りとなるが、虚飾を取り去りまっすぐ向き合うことを、筆を置くその日まで、自らに課し続けたいと思っている。

個展の案内が届いた折には、あいつもまだまだ頑張っているなあと思い出していただければ幸いである。

**小林 英樹**  
こばやし・ひでき  
油画専攻教授



先日着任したと思ったら、もう退職です。この大学に来る前、北海道の大学で6年間働いていましたが、その前は、波乱万丈の、明日の生活すら見通せない日々を送っていました。ぼくは、いつしか、心と心が出会い、触れ合え、深い信頼関係が築けることが人生で一番大切だと思うようになりました。その意味では、音美両学部に掛け替えのない親友、友人が何人かでき、この大学の教員になれて本当によかったです。まだ残していることもいくつかあり、最後まで諦めずに表現者、研究者を貫いていく所存です。

**今井 琳郎**  
いまい・きんろう  
彫刻専攻教授



大学での十二年の勤務も終わり、退任という人生のある意味でのエポックを迎えることになりました。この情況を禪でいうところの円相(十牛図)のなかにある第六図の「騎牛帰家」でありたいと私は願っています。牛に乗って家に帰っていく図は孤独とか疎外というネガティブなイメージを抱くが、その意味は全く異なります。牛は問う自分で、人は本来の自分で、両者はお互いに反発しあう経緯を経て、やがて穏やかな表情のなかで家に帰っていくのです。それは、他者との交わりにおいて本当に開かれた自分で出会い、問う自分と本来の自分が一体となり、「場所に於てある」つまり本来のあり場(家)に帰ってゆくという姿を描いているのです。そして最後の第十図の「入廊垂手」に向けて……。

**森田 義之**  
もりた・よしゆき  
芸術学専攻教授



2000年4月に水戸の茨城大学から転任して以来、13年にわたり本学にお世話になりました。私にとって一番の思い出は、「芸術学専攻」の開設(2001年)にかかわり、多くの若い人材を学芸員や文化財保存の分野に送りだすことができたことです。

2年前に大病でたおれ、最後まで授業をこなせなかったことが心残りですが、愛知芸大のこれから発展を心から祈念しております。

**長谷 高史**  
ながたに・たかし  
デザイン専攻教授



2004年の着任以来、大学院整備委員会委員長、施設整備委員長、法人化担当委員、芸術資料館長と慌ただしく、法人化後は美術学部長、研究科長、法人経営審議会委員、博士後期課程委員長、大学施設整備委員長、芸術情報センター長兼図書館長を仰せつかり、努力をしてきました。2012年3月には美術研究科として初めての博士を輩出でき、又キャンパスマスターplan2011を策定し、整備指針が策定出来た事は大きな成果でした。栄のサテライトギャラリーも企画から場所の検討、契約、設計に奔走しました。大学の社会環境は益々厳しさを増しています。大学に在籍した9年間で、どのくらいの貢献が出来たか判りませんが、精一杯の努力はしてきました。このことは関わった学生が一番理解してくれていると自負しています。ありがとうございました。

**内田 善孝**  
うちだ・よしたか  
教養教育教授



天をにらんで瞑想しているロダン作のバルザック像が講義棟横の芝生にあります。彼は芸術家は「幻視者」だと言っています。辞書では、「ないものがあるように見える」と「幻」の説明がありますが、私はそうではなく、「あるのないように見える」のがバルザックの言う「幻」だと思います。常識や流行などに目を奪われ、あるのに見えない。見えないから、それが「幻」です。私は授業で必ず「幻視者」について、一度は話すようにしてきました。バルザック像を見るたびに、「幻が見えるようになったかどうか」自問して下さい。

## 井上 さつき いのうえ・さつき 教授



## 私の仕事場

私の専門はフランス音楽史で、研究テーマの中心は「パリ万博と音楽」です。これをテーマにしようと思いついたのは今から20年ほど前、1992、3年ごろ、大学の管理棟の中に貼ってあった「愛知県に万博を!」という万博誘致のポスターを見たときのことでした。

手探りの研究でしたが、どうやら形が見えてきて、5年後の1998年に『パリ万博音楽案内』という本を音楽之友社から出版することができました。さらに、その研究を発展させて博士論文にまとめ、それを基に『音楽を展示する』という題で2009年に法政大学出版局から出版しました。

続いて、フランスの中世・ルネサンスの専門家である今谷和徳先生と共に著で『フランス音楽史』という通史を書きました。私が担当したのは後半部分、フランス革命以後、現代に至るまでのフランス音楽の歴史です。これは2010年に春秋社から出版されました。

ということで、私の研究の中心はフランスの音楽史なのですが、この数年、日本におけるヴァイオリン受容史についても研究しています。きっかけは、パリの国立図書館で、1900年万博の楽器部門の受賞者リストを見ていたときに、「スズキマサキチ、ジャポン」の小さい記載を見つけたこと。

昔の万博は商品の国際コンクールの場でしたが、そのコンクールに明治の名古屋から出品した鈴木政吉が入賞していたのです。調べてみると、政吉は1893年にアメリカのシカゴで開かれたコロンブス万国博覧会の楽器部門でも賞を取っていました。和楽器職人だった政吉が、見よう見まねで、第一号のヴァイオリンを完成させてから、わずか5年後の快挙でした。政吉の並はずれたところは、まったく独学でヴァイオリンを作り始め、明治末期には工場での量産体制を確立し、大正期には、量産品としては国際的に通用するレベルアップを成し遂げたこと。近代日本人の気概を感じます。今年は鈴木政吉についての研究をまとめた本を出版する予定です。

さて、政吉の工場では、安価なものから高級なものまで、さまざまなグレードのヴァイオリンを作っていました。なかでも、政吉が手塩にかけて製作した高級手工ヴァイオリンは素晴らしいものだったようですが、日本の楽器博物館にはどこにも所蔵されていないのです。そこで、新聞のコラムで、そのような楽器をお持ちの方がいないか呼びかけたところ、多くの反響があり、ありがたいことに、本学への寄贈のお申し出もいただきました。来年度には本学の芸術資料館に修理された政吉の名器が入ります。どうぞ、お楽しみに。

政吉についての研究を進める上で、名古屋の新聞の戦前の音楽記事をピックアップするという作業も必要となり、音楽学コースの学生3名に協力してもらって、『名古屋新聞』の記事の収集にとりかかっています。こうして得られた情報を広く共有したいと考えていたところ、幸いにも、この企画「戦前の『名古屋新聞』音楽記事索引のデータベース化とその公開」に来年度の学長特別研究費を交付していただけることになりました。このデータベースが完成すれば、戦前の『名古屋新聞』にどのような音楽記事が、いつの号に掲載されたのかが検索できるようになります。名古屋の新聞に関しては初の試みになりますので、こちらもお楽しみになさってください。



## 音楽

|      |        |      |  |
|------|--------|------|--|
| 作曲   | 川村 菜穂子 | 学部4年 | 第13回TIAA全日本作曲家コンクール 審査員賞                           |
| 音楽学  | 糀山 陽子  | 博後3年 | 近代英語協会第29回大会 近代英語協会優秀学術奨励賞                         |
| 声楽   | 小林 円   | 学部2年 | 第6回横浜国際音楽コンクール 声楽部門大学の部 第2位                        |
|      | 奥村 育子  | 博前1年 | 第4回東京国際声楽コンクール オペレッタ部門 第3位                         |
|      | 安田 裕美  | 博前2年 | 第13回大阪国際音楽コンクール 声楽部門歌曲コース A g e-U 第3位(1位、2位なし。最上位) |
|      |        |      | 第4回東京国際声楽コンクール 新進声楽家部門 奨励賞                         |
|      |        |      | 第66回全日本学生音楽コンクール 名古屋大会 声楽部門大学の部 第3位                |
| ピアノ  | 長坂 尚樹  | 学部1年 | 第20回ペトロフピアノコンクール 大学生部門 第3位                         |
|      | 高桑 まや  | 学部2年 | 愛知ピアノコンクール 中日新聞社賞、金賞                               |
|      | 田邊 安紀恵 | 学部2年 | 万里の長城杯 国際音楽コンクール 優秀伴奏者賞                            |
|      | 丸尾 純嗣  | 学部3年 | 神戸芸術センター記念ピアノコンクール 入選                              |
|      | 山木田 真紀 | 学部3年 | 大阪国際コンクール 入選                                       |
|      |        |      | 第22回日本クラシック音楽コンクール 第5位                             |
|      |        |      | 愛知ピアノコンクール 中日新聞社賞、金賞                               |
| 弦楽器  | 金沢 紫   | 学部2年 | 第6回全日本芸術コンクール関西本選 第3位                              |
|      | 小森 佳奈  | 学部2年 | 第6回夢科音楽コンクールin東京 室内楽部門 奨励賞                         |
|      | 清水 綾   | 学部2年 | 万里の長城杯 国際音楽コンクール 第3位                               |
|      | 長谷 真結  | 学部2年 | 第22回全日本ジュニアクラシック音楽コンクール 審査員賞                       |
|      | 小林 奏太  | 学部3年 | 第6回夢科音楽コンクールin東京 室内楽部門 奨励賞                         |
|      | 谷脇 友里恵 | 学部4年 | 第6回夢科音楽コンクールin東京 室内楽部門 奨励賞                         |
|      | 小川 亜希子 | 研究生  | 第18回みえ音楽コンクール 弦楽チェロ部門 第1位、岡田文化財団賞                  |
|      | 田中 千尋  | 博前1年 | 第13回ブルクハルト国際音楽コンクール 審査員賞(2位～5位なし)                  |
|      | 高田 知子  | 博前2年 | 第14回九州音楽コンクール 金賞、最優秀賞                              |
|      |        |      | 第10回ヴェルデ音楽コンクール 弦楽器部門 総合第3位                        |
|      |        |      | 第14回日本演奏家コンクール 第2位(1位なし)、ストリング賞                    |
| 管打楽器 | 平光 優里  | 学部2年 | 第18回KOBE国際音楽コンクール 打楽器C部門 優秀賞、神戸市教育委員会賞受賞           |
|      | 藤井 航平  | 博前1年 | 第5回横浜国際音楽コンクール 弦楽器一般の部 第2位(1位なし)                   |
|      |        |      | 第6回横浜国際音楽コンクール 管楽器部門一般の部 第2位                       |

## 美術

|     |        |        |   |
|-----|--------|--------|---|
| 日本画 | 佐久間 友香 | 学部3年   | 第17回三菱商事アート・ゲート・プログラム 入選                          |
|     | 田中 藍衣  | 学部3年   | 第15回三菱商事アート・ゲート・プログラム 入選                          |
|     | 所 真弓   | 学部3年   | 第15回、第16回三菱商事アート・ゲート・プログラム 入選                     |
|     | 長屋 糸織  | 学部3年   | 第70回多治見市美術展 市議会議長賞                                |
|     | 平田 望   | 学部4年   | 第8回世界絵画大賞展 協賛社賞                                   |
|     |        |        | 再興第97回院展 入選                                       |
| 油画  | 川島 優   | 学部4年   | 再興第97回院展 入選                                       |
|     | 三浦 友里  | 学部4年   | 第37回全国大学版画展 町田市立国際版画美術館買上賞                        |
|     | 宮田 真有  | 博前1年   | 第37回全国大学版画展 町田市立国際版画美術館買上賞                        |
|     | 藤田 典子  | 博前2年   | クラコウ国際版画トリエンナーレ2012 入選                            |
|     | 東条 香澄  | 2011修了 | 第37回全国大学版画展 町田市立国際版画美術館買上賞                        |
|     | 坂本 夏子  | 2011修了 | クラコウ国際版画トリエンナーレ2012 入選                            |
|     | 青田 真也  | 2008修了 | 「POSITION2012 Contemporary Art from Nagoya」展 出品作家 |
|     | 山田 純嗣  | 2000修了 | 「POSITION2012 Contemporary Art from Nagoya」展 出品作家 |
|     | 田島 秀彦  | 2000修了 | 「POSITION2012 Contemporary Art from Nagoya」展 出品作家 |
| 彫刻  | 曾根 麻衣  | 学部2年   | 「POSITION2012 Contemporary Art from Nagoya」展 出品作家 |
|     | 長田 沙央梨 | 学部3年   | 第7回翔け！二十歳の記憶展 準グランプリ                              |
|     | 南村 遊   | 学部3年   | 美術学生展覧会 in NY 2012 Jan Staller(ジャン・ステラー)賞、NY市民賞   |
|     | 宮本 宗   | 研修生    | アート＆クラフトin御仮供杉'12 奨励賞                             |
| 陶磁  | 稻垣 唯志  | 博前1年   | Tokyo Midtown Award 2012 準グランプリ                   |
|     | 松下 紘子  | 博前1年   | 第43回東海伝統工芸展 入選                                    |
|     | 森本 静花  | 博前1年   | 第43回東海伝統工芸展 入選                                    |
|     | 吉田 早希  | 博前2年   | 第6回翔け！二十歳の記憶展 CBC賞                                |
|     | 斎 期天   | 博後1年   | 第43回東海伝統工芸展 入選                                    |